

---

# 十二のBSIS

@mia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十二のBSIS

### 【コード】

N3537Y

### 【作者名】

@mia

### 【あらすじ】

日本とロシアのハーフである主人公が特別なISを乗り回し色々とする話。

姉との因縁、女ばかりの学園、迫り来る様々な敵……。

主人公はこの学園でどういった青春を送るのか！！

## 設定集（前書き）

B S I S を読むにあたって、分からないことが色々あると思うんでオリジナル設定のところだけでも記載することに。

ちなみに、後に出てくる I S のスペック D A T A はあくまで私の想像でしかないのであしからず。

（ H 2 3 ・ 1 1 ・ 2 2 D A T A 更新 ）

## 設定集

日崎ヴァディム

国籍 ロシア

性別 男

身長 176cm

誕生日 五月一日

髪型 セミショート（色はアッシュグレイ）  
瞳色 碧色。

日本（父親）とロシア（母親）のハーフ

母親は元代表候補生。

父親はIS専用プログラマー。

世界でISを扱える二人目の男子。

性格は明るめ、女子にも男子にもこのまれそうなタイプ。

一夏の同居人である。

一夏同様に専用機持ちだが候補生でない。

【イズムルート・フスプイシカ】（翠玉の閃光）

ヴァディムの専用機。

機動力は世界トップ5の中に入り、特に加速度においては世界一。

速さに重点を置いているので、近接武器の扱いに長ける。

さらに誕生石のコアによる補正で一瞬ながら音速を超える速さで動くことも可能。

誕生石【エメラルド】を持つB S I S。

スペックDATA

攻撃力B (近接S 射撃C)

防御力B (機体B 回避A)

燃費B

機動力S (最高速度A 加速度S)

熟練度C

特殊性能C (一覽 ・連続瞬時加速 ・絶対回避)

総合戦力 B

#### 搭載武器一覧

・ヴェーチエル、リョートウ

部類 ツインダガー

非実体武器

ヴェーチエルは【風】、リョートウは【氷】を指す。

刃渡りは約50センチにも満たないが、二つを合わせて長くすることが可能。

さらにエネルギーを増幅することでも刃の調節が可能

・翡翠

部類 日本刀

実体武器

刃渡りは約一M、ISが用いる日本刀の中では短い方。居合をするために鞘も展開することが可能。

スィーティー・ブリーヤ

・灰色の嵐

部類 二丁拳銃

実体武器

何の変哲もない自動式拳銃（イメージとしてはマカロフPMをIS用にしたもの）をさらにイズムルート用に改良したもの）、生身の人間でも携帯できる。普通の拳銃より威力が爆発的に高い。

→マガジンに八発

特殊性能一覧

マルチイグニッションブースト

・連続瞬時加速

瞬時加速を連続して行い、不可能かと思われた曲線行動が可能となっている。

しかし、曲線行動はエネルギーを大幅に消費するため、ヴァディムはあまり好んでない。

直線行動と完全停止の繰り返しを行うことで、相手のセンサーの錯乱をすることも可能。

・絶対回避

シールドエネルギーを消費することで、実体非実体に関わらずほぼ全ての攻撃を避けることが可能。

が、普通に受けた方がエネルギーの消費が少なくて済むという機会がすくなくないので、使い所は考え物。

誕生石のコア

世界に十二しかないB S I Sのコアで、その名の通り十二の誕生石がモチーフ。

それで作られたISはBSISと呼ばれ、それらはどの国にも属さないが、原則その所有者の国籍のISとして扱われる。

が、国家が実験などに使うことは東博士が全禁止している。

コア自身に自我があり（いまだ会話が試みられたことはない）、操縦者を選ぶ。

機体は既に製作が終了しているがいまだに操縦者が現れないコアも何個がある。

普通のISの用に成長していくので、完成はないとされている。

誕生石のコア一覧《内は所有者の国籍

- 一月
- 二月
- 三月
- 四月
- 五月 エメラルド《露》
- 六月
- 七月 ルビー《日》
- 八月
- 九月
- 十月
- 十一月
- 十二月

## プロローグ

「母さん。俺、ようやくスタートラインに立てたよ」

母さんがいなくなって、もう七年が経つ。同時に、姉さんを恨み続けて七年が経つ。

あの夜、姉さんは俺を殺さなかった。あえてそうしたのは明確だった、姉さんは誰よりも“喜劇”を楽しむ人だった。

母さんを殺して、尚且つそれを“喜劇”の始まりと叫んだ姉の顔は今でも忘れられない。

IS……。母さんが好きだった物、姉さんが殺しの道具として使った物、そして何よりそのISで、俺は姉さんに打ち勝つ。

まさか、俺までISに乗れる日がくるなんて思いもしなかった。しかも専用機まで用意されているとは、父さんに感謝しないといけない。

日本人でありながら、ロシア軍のISプログラマーをしている父さん。七年前に作った父さんの二つ最高傑作の内、一つは姉さんが、もう一つは俺が受け持った。

当初から、俺が受け持つ予定だったらしいがいかんせん動いてくれなかった。



母さんのコアを使うまでは。

死ぬ前までロシア代表生だった母さん、その母さんのISの主力武器であったツインダガー、“ヴェーチェル”と“リョートウ”を待機状態のISに添付する。

ロシアの《凍える風》、それが母さんの二つ名だった。

《イズムルート・フスプイシカ》

ロシア語で“翠玉の閃光”と呼ばれ、機動力に長けた近接戦闘万歳な俺の相棒だ。

待機状態のイズムルートは、ペンダントとして俺は身につけている。自分の誕生石でもあるので、何故だかはわからないけど安心感がある。

「母さん……。俺、そろそろ行くよ」

最後に母さんとの思い出を少しだけ思い出してから、俺はこの家をでた。

プロローグ

（オワリノハジマリ）

インファイニット・ストラトス

IS、それは世界のどの兵器よりも総合戦力で勝る兵器であることは、既に証明されている。

何故か女性だけが扱え、男性にはピクリとも反応しないらしい。にも関わらず、世界で“唯一ISが使える男子”それが、織斑一夏だった。

今回はラッキーとしか言いようがない。秘密裏で行うには限界があるし、ISが使える男子が一人でたっても数人いてもおかしくはないはず。

怪しまれるのを防ぐために、少し転校を遅らせる必要があったが、まあいいだろう。

「じゃあ、行ってくるよ」

誰もいない家にしばしの別れを告げて、俺は家を飛び出した。

ここからIS学園までは電車で一時間程かかる、徒歩の時間を含めると一時間半になる。

今回はIS学園から迎えがくる手筈がついていたので、気が楽なはずだったんだが……。

何故か家の前には黒塗りの外車が止まっていて、それはこの空間には異質なものだった。

俺が唾然としている内に、後部座席から一人の女性が降り立った。一目みてただ者ではないという気配を感じとった俺は、思わず警戒体制をとってしまった。

「やあやあ、気が日崎ヴァディム君だね。その体制は正解だけど、

今は下ろして……ね」

顔と声は笑っていたが、眼は笑っていなかった。

「あ、はい。すみません」

「意外と日本語流暢なのね」

俺が警戒体制をとった途端に、ようやく自然体を見せたこの女性は専用機保持者みたいだった。

「えっと、どちら様ですか」

「私は更織楯無、IS学園の生徒会長であり学園の長」

凜、とした立ち振る舞いで会長は続けた。

「つまり、学園では最強ってこと」

更織先輩、と言おうとすると楯無でいいとのことだった。

「楯無先輩はどうしてここにいらっしゃるんですか」

「ん、私はとある任務の帰り。折角だから転入生でしかも男子な君を一目見たくてね」

それから視線を上から下に移動させて、また上に戻す。

「ふうん、面白いね」

「一体これで何かわかるんですか」

答える代わりに先輩は微笑みを返し、それについては何も言わなかった。

「ささ、早く乗った乗った」

楯無先輩に背中を押されて、黒塗りの車に乗る。中は見たことないぐらい広いし、座席もかなり高級そうだった。

「すごいですね、この車」

「まあ、君はお客さんみたいなものだからね」

それからも色々と会話しながら、しみじみと高級車の感覚を味わっていた。

これから、新しい日常が始まる。そう思えるだけ、今は楽しめそうだったことだな。

## プロローグ（後書き）

えっと、@miaです。

以後よろしく願います。

……アニメもだいぶ前に終わったし、原作はもう半年も出てないし、  
需要ってあるのか？

いや、私の需要がある（笑）

次回からさっそく戦闘に入っていきますよ。

## 第一話 翠玉の閃光

「皆さん、今日は転入生を紹介します」

「またこのクラス？」

「今度はどんな可愛い子かな」

「きっと候補生なんだろうね」

「静かに、それでは紹介しますね」

教室のドアを開けて中に入る。すると、教室内が一瞬静かになる……が。

「「「きゃあああ「「「

と思うと大多数の女子が騒ぎ始めた。

「えっ、何。男じゃん」

「織斑君だけじゃないの？」

「しかもまた美少年」

この教室の騒ぎに一切動じないのが一人だけいた。

「お前ら、静かにしろ」

織斑千冬、織斑一夏の姉であり、元チャンピオン。

「織斑……千冬、さん」

「ん、流石に私は知ってるか」

話を聞くところによると今はここで先生となっているらしい、てか、先生だ。まあ、妥当なところだろう。

優秀な選手ほど優秀なコーチはいない、と俺は思っている。

「さて、自己紹介をしてもらおうか」

軽く返事をしてから、教卓に向かう。そして黒板に自分の簡易プロフィールを表示させてから、自己紹介をする。

「えっと、名前は日崎ヴァディム、歳は十六。母さんはロシア人で、父さんは日本人。一応世界でISが使える男子ってことになってます」

最後によりしく、とだけ付け加えると教室がまた沸く。

## 第一話

く翠玉の閃光く

「えっと、日崎君だっけ」

「織斑一夏か、俺のことはヴァディム、呼びにくいならヴァンで」

「おう、俺のことは一夏って呼んでくれ。いやあ、これで男子三人目が来てくれて助かったよ」

「三人……？」

データにはそんなことは記載されていない、ISの部分展開してからデータベース検索を行ったが、結果は同じだった。

「やあ、僕はシャルル・デュノア」

「……日崎ヴァディムだ。あと、少しいいか？」

上を指しながら、二人に言う。

「屋上……ね」

「じゃあ、案内するよ」

シャルルは勘がいいのか、少し警戒体制になったようだが一夏は今だに普通のままだった。

「で、何を話そうとしたんだ？」

「僕も気になるよ」



「単刀直入に言おう。……シャルル、お前女だろ」

一瞬、二人の顔が引き攣る。

「どうやら、本当みたいだな」

「……それを知って、どうするつもり」

場合によっては、口封じの為に君を殺すよ。とでも言いたげな目で俺を睨んではいるが、まだ武器は出していなかった。

「別に、ただ確かめたかっただけさ。男が簡単に乗って良いようなもんじゃない、このISってのはな」

「え、そうなのか」

「ああ、多分一夏は束博士に選ばれたんだろうよ」

「ヴァンもか？」

「いや、俺はこいつ以外は全く動かせない。IS適性も『測定不能』だ」

ラファールも打鉄も試してみたが、結果は同じ。この《イズムルト》だけが、俺を受け入れてくれていた。

「ならどうして君は乗れるのさ、実は君も女の子じゃないのかな」

「別に証明しても良いんだぜ、一夏を呼んだのもそのためだ」

「むづう……。分かった、信じる」

要らない想像までしたのか、シャルルの顔は少し朱かった。

「さて、今日の一時限目は実習だったよな」

部分展開させたISから情報を確認する、と共に時刻の確認。

「そろそろいかないとヤバいな」

「俺まだ着替えてねえよ」

普通は下に着ておくだろ。

「早く行くよ、二人とも」

全力疾走で更衣室経由でアリーナに向かったが、少し遅れてしまったので後に伝えられるであろう伝説の出席簿チョップを、早くも受けるはめになっていた。

「今日の授業は……。そうだな、ヴァディム」

「はい」

「ISを展開してみる」

生徒から少し離れて、ISを展開する。

「あれ、ヴァンのISってなんか小さくないか」

「こいつ設計なんだよ」

それもそのはず、この《イズムルート・フスフィシカ》最大の特徴は、等身大のアーマーを全身装甲の様になっている所だ。

だから、各身体のパーツ毎にピッタリフィットするよう生計された俺の専用機は、小さくなるのが普通なのだ。

機動力を高めるための、このやり過ぎ感がまた堪らなくいい。

「よし、じゃあ誰かヴァディムと模擬戦してみる」

「私がやりましてよ」

セシリア・オルコット。

イギリスの代表候補生で、専用機は《ブルー・ティアーズ》だっただけか。

「相手にとって、不足無し」

「なら、所定の位置につけ。生徒は観客席へ急いで移動しろ、5分後に開始する」

所定の位置までISでゆっくりめに飛んでから、最終チェックを行う。

大体各エネルギーはマックス近くまでチャージ済み、機体の反応も悪くない。

ちなみに、エネルギーは満タンにしない派だ。たくさんいれっぱなしってのはなんだか好きじゃない。

そんなこんなで、5分後。

『では、始めるぞ』

「いつでも」

『同じく、ですわ』

今回はカウントダウンは無しで、すぐに始めるのこと。

「覚悟はよろしくて？」

「……そんなことを言っただけのも今の内だ」

「威勢だけは、褒めてさしあげましょう」

ムカつく奴だな、こいつ。

「時間も少ない、5分で決める」

「決められる、の間違いではなくて？」

ああやって高みにいられるのも、今の内……。力は使うべき時に使うべき形で使う、それが正しい使い方だ。

「一気にカタをつけますわ」

遠距離からの射撃攻撃、それが彼女の戦い方だった。あれだけの装備を全発射しても“隙間”は必ず生まれる。

「……相手が悪かったよ、お嬢さん」

意識を一点に集中させる、そして瞬時に爆発させるイメージ。

「加速するぜ」

弾丸と弾丸の間をすり抜けて接近する、普通のISの様に無駄に幅広くないので、スイスイと進む。

既に弾丸のスピード、軌道、そして威力は大体把握済みだ。途中でツインダガーを用いて落とせる弾は落としていく。

「意外と、やりますわね」

射撃を取りやめ、ビット攻撃に移る。

「これなら……」

「だが無意味だ」

そのビット攻撃こそ、彼女最大の攻撃方にして最大の過ち。

普通ならその不規則な攻撃に悩まされるところだが、残念ながらビットでの攻撃中に棒立ちしている相手に俺が劣るのはありえない。

「マルチイグニッションブースト  
連続瞬時加速」

これを用いて、加速から攻撃を繰り返す。そうすることでビットを全てたたき落としてから……。

「終わりだ」

後ろから喉元に“ヴェーチェル”、そして背中に“リョートウ”を突き立ててそう呟く。

「降参するか？」

「……私の、負けですわ」

こうして、対候補生戦績は幸先がいいことに勝ち星となった。

## 第一話 翠玉の閃光（後書き）

どうも、@miaです。

いかがだったでしょうか。

面白いと思った人も、面白くないと思った人も、ここまで読んでもらってありがとうございます。

タグに関しては、今だとネタバレになってしまうのでまだ控えめです。

その内色々と開放されていくので、これからもよろしくお願いします。

## 第二話 銀髪の少女

模擬戦を終え、ピットへと降り立つとドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

「貴様がヴァディムか」

「ああ、そうだが」

冷淡な声や左眼にした眼帯が彼女がいかに強いかを語っているよ  
うな、そんな気がした。

「今の戦い方だが……中々に面白い」

「そりゃどうも」

「だが、機動力に頼る戦い方では私のシュヴァルツエア・レーゲンは倒せないぞ」

確かに、あのAICはかなりの強さを誇る。だがしかし、それだ  
だつて弱点がないわけではない。

「ああ、そこが問題なんだよな……」

ここはとりあえず、対策なしという対応をしておいた方が後々で  
戦った時に有利っぽいので、そうしておくかな。

「楽しみにしてるぞ」



颯爽とばかりに立ち去っていく彼女の後ろ姿を見つめながら、俺はしばらくその場を動けずにいた。

「……って、今は授業中じゃん」

胸によくわからない蟠りを残しながら、俺はアリーナへと向かった。

## 第二話

〈銀髪の少女〉

「ヴァン、お前こんなに速く動けるのか」

「まだ速く動けるけどな」

ちなみに、今回の戦闘に関して彼女は不服なようだった。まあ、それもそのはずだろう。イギリスの代表候補生たる者が僅か5分もかからない内に負けるなんて、誰が予想出来たか……まあ俺は勝つことしか頭に無かったがな。

「ヴァデームさん、今回は負けましたが次は負けませんわよ」

と言い残して、彼女は去っていった。……いかにも負け犬っぽい台詞だと思ったが、彼女のプライドのためにも少しばかり黙っておこうじゃないか。

それから時間は流れ、昼休憩に。

「学年別トーナメントねえ……」

「ん、まだ考えてたんだ」

昼食であるカレーライスを食べながら、俺はシャルルの言う通り  
思案中だった。

今日の実習が終わってからすぐに生徒に通達され、この昼休憩で  
はこの話題で持ち切りだった。というよりは、持ち切らざるを得  
ないと言った方が正しいのか。

「しかも、二人組ときた」

つまり、誰かとペアを組まなくてはならないそうなのだ。この学  
園で友人が極端に少ない（まだ転校初日だったのに色々ありすぎだ  
るおい）俺にとってはかなり痛い話である。

「そういえば、ヴァンは誰と組むんだろうか」

「さあ、僕は一夏と組むからなあ」

一夏はシャルルと組むらしいし、これは困ったな。今のところは、  
この二人しか友人がいらないから……。リア充爆発しろって、今使  
って良いんだっけ？

そんなことを考えながら、食事をしていると。

「ねえねえ、日崎君はもう決まってるのかな」

「もしいなかったら、私と組んでくれないかな？」

「あ、抜け駆けはするいよ」

「いや、ちょっと皆落ち着こつぜ」

食堂にいた数人の女子に押しかけられて困っていたところ、そこに颯爽とある少女が現れて。

「私に決まっているだろう」

周囲のざわめきが一瞬にして止む、正にこれこそ嵐の前の静けさ。とても言えば良いのか、それをいいことにラウラは俺の方に近寄ってきた。

「異論は？」

「ない、というかこつちから願い出たいとこだな」

学年第一位の実力を誇るのはきつと彼女だろうし、その彼女から声がかかると言うことは俺の実力が少なからず認められているということに繋がる。

それに、俺自身が間近で彼女の戦い方を見てみたかったってのもある。

「それなら問題ないな」

その会話を聞いて、さっきまで群がっていた女子達は散らばってしまった。

少し待ってもラウラがもう何も言いなさそうだったので、再び昼食であるカレーライスに手を伸ばす。

「いやいやいや、ちょっと待ってよ二人とも」

「そんなに簡単にタッグ組んでもいいのかよ」

「簡単も何も……な」

「そうだな、ヴァディムの言う通りだ」

「自分が一番強いと思う奴と組む」

お、見事にハモったな。てか、俺ってラウラからそう思われてたんだ。嬉しいじゃないか。

「……この二人ならなんだか良いような気がする」

「一夏、同感だよ」

そして二人も昼食を再開する。

「あ、そうだ。ラウラ、放課後特訓用にアリーナの申請を……」

「既に終わっている、一七三 から第四アリーナだ」

「了解」

最初から俺を誘うつもりでここにきたようだったので、手間が省

けたらしい。ちなみに、俺としても手間が省けたので良かった。

「ではな」

既に昼食は済ませていた様で、ラウラはくるりと踵を返して教室へと戻っていった。

その後ろ姿にまた見とれていることにまた気がついて、あわせてカレーを食べに戻る。

「ヴァデイル君って……」

「ん、なんだ」

「もしかなくても、ラウラに惚れたでしょ」

「ん……、そうかもな」

確かにラウラに好意を寄せていることは認める、でも単純にそれだけじゃない気がするんだがな……。

「あまり否定しないんだね」

「まあ、彼女に会うのもここに来た一つの理由としてある。……勘違いしないでほしいが、これは専用機持ちの面々を見たかったと言う意味に過ぎないからな」

言い訳ともとれる言葉を濁しておきながら、またカレーに手を伸ばす。

「なるほど、なら後で白式とも模擬戦するか」

「僕のR・リヴァイヴ・カスタム？ともしてほしいな」

「なんなら、二人まとめてでもいいぜ。どうせ二人組のトーナメントなんだし」

「言ったね、後で後悔しても知らないよ」

「ここまで言われては引き下がれねえな」

「あ、やっぱり明日以降でもいいか？」

今日はラウラとの訓練に専念したい、というのもあるが単純に模擬戦を一日に何回もするもんじゃない。

とりあえず、そうやって濁しておきながら今日の昼を終える。

その日の放課後、指定された時間の10分前にアリーナに着くともうラウラはそこにいた。

「早いな」

「……ふん、お前が遅いだけだ」

「まあ、今日からよろしくお願いしますよ。教官」

「……私はそんなに大それた人間ではない」

瞬時に織斑先生を思い比べたのか、ラウラは少し肩を落とすよう

な雰囲気だった。……こりゃ口が滑ったというレベルで済みそうではないな。

「スマン、ちょっとした冗談のつもりだったんだが」

「気にするな。いずれ私もそうなる身だ」

ラウラが教官か……。

それをイメージして、すぐにピンと来ることから多分ラウラにはその気質があるんだと思うし、そのための実力はまだまだ向上していくだろう。

「んじゃ、改めてよろしくな。ラウラ」

「ああ、こちらこそ頼む」

握手を交わして、俺達のペアはここからスタートした。

「それじゃあ、まずはどうしようか」

「うむ、まずはお互いの機体のデータが必要だな」

そういつて、ISを部分展開させるラウラ。それに習って俺も部分展開する。

本来なら、全展開の方がいいがそうすると俺の視線が合わないの  
でそうしてもらった。

「それにしても、このAICってやっぱ脅威だな」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラーのそれぞれの頭文字を取ったその能力は、感性停止能力でありロックした相手の動きを止めることが出来る。

ラウラ自身は、この能力のことを停止結界とかなんとか言っていたが、ズバリの得た表現である。

かなり高性能な感じだが、弱点がないわけではいと思いたい……。今はまだ見つけられないが。

「機動力ではお前の方が上だ。だが、これでは遠距離戦闘はほぼ苦しいな」

「基本的にはこの近接戦闘が、イズムルートの持ち味なんだがな」

「あらゆる場面を想定して、戦い方を考慮しないとダメだぞ」

「なるほど、だからラウラのISは万能型なんだな」

「当たり前だ」

「とりあえず、作戦と言っても一対一に持ち込む戦い方が一番手っ取り早いと思う」

「それができれば問題はないが、敵も基本は連携をとってくるだろう」

「なら、こっちも連携とってみるか？」



「そうだな…… お前のその機動力を私の攻撃力に転化、あるいは私の停止結界をお前の攻撃力に転化する」

「具体的には？」

「前者はお前が私を武器ごとの適性位置まで高速で運び、そこから攻撃を打ち込む訳だ。後者は私が停止結界を用いて敵を止めている間に、お前が攻撃を打ち込む」

どちらにしる口にしてしまえば単純なんだが。

「前者の場合は、俺とラウラのタイムラグが発生する可能性。後者に至っては、俺がA I Cに巻き込まれないかが心配だ」

「前者は地点に達したら勝手に降りる。私はその程度のタイムラグを測定出来ないとしても？」

「後者の場合は？」

「お前が攻撃するときだけ、停止結界を一時的に解く。なるべく相手が動く暇なき連続攻撃を与えてほしい」

「了解、わかりやすい説明だった」

こうして、俺とラウラは簡単な作戦会議を終えて特訓に入ることにした。

## 第二話 銀髪の少女（後書き）

予定より早めに第二話を投下してみましたかどうでしょうか？

今回はちょっと内容を濃くしてみたつもりでしたが、はたして伝わったでしょうか……。

さてさて、とりあえずは次の話の予告的な感じになると思っています。

今回の前半部分は大体この特訓とかについてなんですけど、後半からこの作品のタイトルでもあった伏字の部分について書こうと思案中です。

このまま伏字のままにしておいても良かったのですが、やっぱり隠したままと言うのは居心地が悪いので。

なぜ、【イズムルート】が彼を選んだのか。

気づいている人があまりいないことを祈りつつ。（面白みが半減してしまいそうですので主に私の）

それでは、また週末（予定）にでも。

### 第三話 誕生石のコア

「とりあえず、軽く準備運動がてらに軽くやるか」

「ん、そうだな。ラウラのAICのタイミングとかも知りたいし」

模擬戦、というよりかは武術などに使われる約束組手に近い戦闘。俺のISに合わせて、近接限定の組手は妙に楽しくもあった。だが忘れてはいけない、これが人殺しの兵器になりうることを……。

「どうかしたか、ヴァディム」

「ん、少し考え事をな」

約束組手とはいえ、戦闘中に余計な考えを持つとは我ながら情けない。

今は集中して、ラウラに向き合わないと彼女に失礼だ。過去なんて振り返っている場合ではない、振り返る必要もない。

### 第三話

#### 〈誕生石のコア〉

ラウラと特訓を始めて早三十分も経っている、大体俺の速度を攻撃転換するのは把握出来たようで（戦闘においてのラウラの適応能力は半端ではない）次はラウラが一度AICを用いて敵の動きを止めて、そこに攻撃を打ち込む方の練習なのだ。

「また失敗……か」

「済まない、ラウラ。タイミングがどうも掴めなくて」

特訓方法は至ってシンプル極まりないので、ラウラが空中に放り投げた空のマガジンをAICで停止させ、それに向かって俺は加速。その後、タイミングを合わせてラウラがAICを切断することで、俺はAICの効果を受けないまま攻撃を加えることが出来る。

……と言っわけなんだが、いかんせん上手くいかない。

まず、瞬時加速が使えないのは痛かった。自分の身を案じるためでもあるが、スピードがイマイチ乗らないのでタイミングがズレる。

「まさか、初速度の向上のために加速する時に一度瞬時加速しているとは」

「といつても、三メートルあれば十分なんだが……」

今回はその課題もついでに乗り越えよう、というラウラの提案で瞬時加速は使わないことになっている。

そして、二つ目はなににより目標が小さいんだよこれが。

空のマガジンつつても、IS用ではなく通常武器の方を用いている（理由は学園内にいらないのが多数あったからだそうだ、いつ調達したかはあえて聞かないでおいたが）ので、当てづらい。

「こつ、居合とか使えないのか？」

「……それだ！」

「ん？」

全く懸念してなかった。

そうだよ、居合を使えば良いんだ。基本的にツインダガーばかり使ってるから、日本刀の装備のことを忘れていたよ。

てか、イズムルートの初期搭載武器だった……。

「日本人である父さんに感謝しないとな」

ツインダガーを一度戻して、日本刀【翡翠】を展開させる。

「ふうむ、良く出来ているじゃないか」

日にさらしてその輝きを見ている、心が洗われるような感覚……。

このままでは居合は不可能なので、鞘も展開しておく。というかまあ居合なんてやったことがないからうまくいくかどうかなんてわからないが、とりあえずやってみよう。

「いいぞ、ラウラ」

さっきまでの一連の流れで空のマガジンが放り投げられ、それが途中で止まる。その止まった瞬間を見計らって、踏み込む。

一歩目は半歩程度に留めて、体制を整える。前傾姿勢にしつつ二歩目は大きく踏み出して、そこからスラスターを用いて加速する。

居合の極意はよく分からないが、とりあえずイメージだけを浮かべる。目標を定め、刀に手をかけ、一気に引き抜く。

先ほどはなかった手応え、確かにマガジンに攻撃を当てることが出来たのだが。

「まだまだこれでは使い物にならない」

マガジンは不揃いな形で割れていた。中心（多少の誤差はあれども）を捕らえて斬らないと、ラウラの合格ではないみたいだ。

「でも、これで感覚は掴めたはず。もう一度頼む」

今日の特訓時間ギリギリまでこれが続けたが、成果は少なく合格を貰える所か今だに攻撃が当たる確率も三回に一回程度だった。

一日で身につく技術でないことは覚悟していたが、こつも上手くいかないのは少し気が滅入ってしまうが、新しいことに挑戦する時は大体こうだ。

と、自分自身に言い聞かせて今日のところは解散することになった。んで着替えをちゃちゃっと済ませ、寮に戻る途中……。

俺はとあることに気がついた。

「俺の部屋ってどこだよ」

大体放課後までに教えてほしいものなのだが、まあとりあえず夕食時なのでそれを食べてから山田先生でも織斑先生でも探すとしよう。

一夏とシャルルはもう夕食に向かったらしく、どこにもいない。ラウラはラウラで何か用事があるって言ってたので、現在は一人淋しく夕食に向かわなければならぬ状況下に置かれている。

「おい、日崎」

後ろから声がしたので振り返ってみれば、織斑先生がそこにいた。

「何でしょうか」

「ちょっとこい、大事な話だ」

こっちとしても、部屋割のことについて色々と聞きたかったから丁度良かった。

織斑先生に肯定の意思を伝えると、何も言わずに歩いていくので慌ててついていく。

歩いて5分くらいだろうか、俺は自分のクラスにいた。当然、そろそろ夕食の時間なので誰も教室にいるわけがなく俺は織斑先生と一対一で対話する形になった。

「それで、用件はなんですか」

「なに、簡単なことだ……」

コンマ何秒かの間に、俺は織斑先生に後ろ手を取られていた。

「そのIS……BSISか、それをどこで手に入れた」

「ちよつ、先生。離して下さいよ」

「それは無理だ。そんなことより、私の質問に答えろ」

「答えるも何も、貴女は知ってるはずですよ」

BSIS、その単語の意味を先生が知っているのならばこの質問は無意味だ。

「東博士にしかISのコアは作れない……これが答えです」

「何を言うかと思えば、そんな洞を吹くか」

「賢い貴女なら分かるはずですよ、博士の性格上……ね」

「生憎、私は分からないな」

「妹思いな博士なら、と言った方がいいでしょうか」

「……」

「貴女が気づいていないはずがない、俺がBSISに乗っていることが意味することを、もう針は動き出していることを……」

「黙れ……」



その声はとても低く、女性だとは思えない程の威圧感。それを放つだけの理由が、この件にはあった。

BSIS……、正式名称は【バース・ストーン・インフィニット・ストラトス】といい、誕生石のコアを用いて作られた十二機のISのことを指す。

東博士が一番最後に作ったコアで、ISのスペックを最大限に引き出すことができるコア。それが誕生石のコア。

だがしかし、そのコアで作られたISには自己意識が生まれるらしく、操縦者を“ISが選ぶ”形になる。

つまるところ、最大限引き出したISのスペックを最大増幅できる人材が選ばれる。そこに善悪の意識は関係ないので、誕生石のコアに選ばれた人間は正に神に近い人間ともいえる。

さらに、BSISは東博士による支配下から逃れるのでそれに乗って好き勝手に行動することが可能になる。

今は力をセーブしている（というよりかはまだ試作段階で全力を出せないだけだが）イズムルートも、膨大な能力を秘めている。

「分かってます、これを扱うことが何を意味するかなんて」

いずれ戦争に巻き込まれる可能性だって少なくはない。今は条約が結ばれているから良いものの、この条約が意味を成さなくなつた時点で俺はロシア軍に所属されるだろう。

いくらIS学園が無国籍学園だからといっても、条約が破棄され

た時点できつとこの学園も壊滅される。多分、ではなくて絶対に。

「……分かってなんかいない、ISを用いた戦争なんてものがどれ程までに残酷かが」

「確かにBSISは戦争の起爆機になりえます。しかし、抑止力にもなりますよ」

かつて各国がごぞつて核兵器を保持していたのと同じ様に、人は起爆材になりうる抑止力を求めている。

「それに、イズムルートが俺を選んだ」

別に乗ることを義務づけられてる訳じゃないけれども、俺にはやらなきゃいけないことがある。

「俺はイズムルートと共に歩むことを決めた、そして姉さんを倒さなければならぬ。……貴女がISを用いた戦争に関して否定的なのは知っている、博士がよく言っていたから」

「……」

「博士だつて、今自分が作った機体の制御が出来ないことが辛いはずだ。だけれども、そこで手を休める訳にはいかない」

博士がしてくれたことに対する感謝の念も込めて、俺はこのイズムルートと共にある。ISで変わった自分の運命を受け入れ、そしてISで終止符フィナーレを打つためにも、イズムルートは必要だから。

「そして、一夏が使っているIS【白式】……これはBSISとは

また別だけれども、起爆材でもある抑止力の一つ」

簡単に言えば、対BSIS用ISとでも言えるだろう。対BSISどころか、全ISに対しての抑止力にもなりうる程にあのISの力は大きい。

「貴女が知らないはずがない」

と、もう一度だけ言ってから後ろ手に捕まれていた体制を一瞬で解く。

「っ……」

「今の貴女なら、あの一夏でも勝てますよ」

それ程に彼女はISを、そしてたった一人弟を大切に想っている。束博士のことだって多少は心配しているはずだ。

それに、彼女はもうISからは離れられない。

「もう一つ、多分知らないでしょうから言うておきますけど。束博士の妹さんが七月のコアから選ばれました」

それを聞いて、さらに瞳孔を開いてこっちを見てくるが、彼女に選択の余地はないし、尚且つ立ち止まることすらもう許されない。

過去の栄光だけでは、この先は意味がない。

### 第三話 誕生石のコア（後書き）

いかがだったでしょうか。

自分としては説明口調で今回は進めていたんですが、少々重苦しかったかもしれませんね。まあ、意図的にそうしたわけですが。

そして千冬姉ファンの方々には謝っておきます。  
なんか全然らしくないかんじにしてしまいました。

まあ、色々と原作ブレイクしていくと思いますかなるべく温かい目で見てもらえると嬉しいです。

#### 第四話　＼ISという力＼

イズムルート・フスプイシカ……。

表面上では500もないISの一つ、そしてそれらのISより高いスペックを持ちながらもまだまだ成長の幅が半端じゃないくらいあるという。

イズムルートは速さを欲している、それがなぜなのかは分からない。でもイズムルートは他のタイプは受け入れなかったらしい、そして俺以外を選ばない。

なあ、イズムルート。

お前は何故俺を選んだ……いや、多分選ばれる運命だったとしか言いようがないのかもしれない。

#### 第四話

＼ISという力＼

そろそろ夕食時というころ、俺はさっきの曇った気持ちを晴らすと、俺は食堂に向かった。

「あ、日崎君。丁度いいとこに」

「山田先生」

「こちらに部屋割の紙があります、それに従って自分の部屋に行ってください」

渡された紙を見ると、どうやら二人部屋を一人で使ってオツケらしい。事前に荷物は送っていたので、整理は結構楽だと思う。

「荷物運ぶの大変だったそうですよ」

「うっ……すみません」

「まあ、IS使いましたけどね」

いや、そんなに重くないはずだし……。てかそんなことでISを使うなよ、おい。

「とりあえず、夕食食べてから荷物の整理します」

「よろしくお願いしますよ」

山田先生と別れて、食堂に向かう。今日の夕食は何カレーにしようか迷っていると、後ろから声をかけられた。

「よお、ヴァン。今から夕飯か？」

シャルルと訓練を終えた後そのまま来たんだろう、二人で来ていた。

「そうだ、今晩は何カレーを食べようかと思ってな」

「昼もカレーじゃなかったっけ？」

「そうだが、何か問題でも？」

昼と夜じゃ食べる種類が違うから、俺的にはノーカンだ。朝は毎朝日本人的朝食を食べてるし……。別に問題ないだろ？

「いや、問題というか……な」

「うん……ね」

「二人して何をアイコンタクトとってるんだよ。まあ、二人も一緒に食べようぜ」

食券を買って（ちなみにグリーンカレーにした）おばちゃんから商品を受け取り、空いている席を探す。

「うーん、中々見つからないな」

「ちょっと待ってて……よし」

シャルルが何かを決意したように、とある席に向かっていきそこで数回の対話を交わした後でこっちにこい、的アピールをしたので一夏と共にそっちに向かうと数人の女子と相席することになった。

「うわあ、織斑君とデュノア君と夕食なんて夢みたい」

「じゅめんね、急に頼み込んで」

「い、いやいやいや。こんな幸福なんてないですよ」

「ありがとな」

なんか、俺疎外感？

「えっと……もしかして俺って邪魔？」

「ううん、別に」

とりあえずは良かった……。

「あまり気にかけてないから」

前言撤回。

やっぱり俺って邪魔じゃん、この転校初日の疎外感がいつまで続くかな……。うん、頑張ろう俺。

その後も、色々と疎外感を感じながら夕食を黙々と食べて、とつとと去ることにした。

一夏やシャルルが制止するが、部屋の片付けも残ってるのでという理由で先に帰った。

早足で自分の部屋に向かったので思ったよりかは着くのが早かった。とりあえず部屋割の紙と同時にもらった鍵を用いて、部屋のドアを開ける。

部屋の中に入って、電灯を点けてから辺りを見渡す。



ISを使う程に大きな荷物は持ってきたつもりは無かったので、少し違和感があった。

部屋のだ真ん中に鎮座されている、馬鹿デカイ段ボール箱……。

隣に置いてある自分が持ってきた段ボール（引越しの時に用いるくらいの大きさ一つ）の数倍はある。てか、絶対一人入るよこれ……。

「もしかして、東博士ですか？」

「んや、当てられちゃったねえ。じゃあ用件を……」

「イズムルートは渡さない」

「ありや、わかった？」

「当たり前でしょ、貴女のポリシーは俺だって知ってる」

彼女は完璧にして十全な篠ノ之東である、すなわち作るものも完璧において十全でなければ意味がない……。

彼女にとってこのBSISは欠陥品である、だが俺にとっちゃ唯  
一なもんでね。

「貴女が完全なる完璧を心情「ソフトウェア・オブジェクト」にしているのは知っています、しかし……

……

「ちよっちタイム、君は何か勘違いしてるよ」

「え？」

「これこれ、じゃーん」

彼女は段ボールの中から飛びでて、さっきまで自分が踏み台にしていた箱を取り出そうとする……が。

「ふにに……、お、重い」

「いや、手伝いますよ」

イズムルートを部分展開させて、段ボール内から器用にブツを取り出す。

「これ、なんか異様に重いんですけど……」

「まあ、全部マトリョーシカ的な感じの多重ロックなんだけどね」

彼女がそこまでしなければならぬ理由があるものが、この中にはある。と、少し考えている間にも既に解除が終わっていた。

「さあさあ、中身をご覧ください」

中には二つの拳銃、そしてチップが一枚入っていた。

「これは……？」

「見ての通り二丁拳銃、その名は【スィーエールイー・フリーヤ灰色の嵐】」

名は体を表す、とはよく言われるがこの二丁拳銃は正に灰色だっ

た。IS用、というかイズムルート用で少しサイズが大きいし重い。

「君のには遠距離系武器が無かったから、特別サービス……と言いたいところだけど」

「今回の目的は別、ですか」

「そうだねえ、本来の目的はこっち」

そういって、チップを取り出して微笑む彼女。

多分、イズムルートに関わる何か。……まあ、どんなときでも俺には選択肢がないわけだが。

「……仕方ないですね、はい」

右腕を展開して、彼女に差し出す。待ってましたとばかりに何本かの線が繋がって、操作が始まるが……すぐに終わる。

「終わったよん」

「一体何をしたんです？」

「パススロット拡張領域の拡大とそして イズムルートこの子が フォームチェンジ形態移行するために必要な素材を、ね」

詳しい説明によると、拡大した拡張領域に灰色の嵐を追加してその残りの領域に形態移行した時に武器が生成できるようにデータを改ざんしたらしい。

データ上では、灰色の嵐が領域のほとんどを占めていることになるが実際はイズムルートが更に強化されていくため……。いや、もっと完全にして完璧なISを完成させるために。

それが彼女の欲望であって、俺が姉さんを倒すためには必要な力。

「イズムルート、調子はどうだ？」

もちろん答えてくれるわけがないし、俺だって答えを期待したわけじゃない。何というか、もう癖になった感じである。

「ちなみに、灰色の嵐はわざわざ部分展開せずとも携帯できるよ。重さ《ウエイト》の調整は自分でしてくれなきゃ」

「いや、別に俺はこんな物騒な物を携帯する気はないで……」

「これからの時代がどういうものかわかってるかな？」

……。

言葉も出なかった。

その言葉には、別の意味がこめられているような気がしてならなくくて。

俺は、ずしりとくるとても重い拳銃を手に取る。

この重さと天秤にかける人の重さは、計り知れないものと同じながら。

## 第四話 くISという力く（後書き）

いえくい、第四話目だく。

前回よりまた重い話になってしまいました。

えくと、まあでもこれが@m i a仕様ってことで勘弁してください。

こんな感じでどんどん突き進んでいきますが、どうぞよろしくお願  
いします。

## 第五話 忘却の彼方

IS学園の地下にある射撃訓練所に俺はいた。勿論、さっき受けとった拳銃の試し撃ちをしにきた。

博士は用件が済んだ瞬間にどこかへ脱兎のごとく逃走していったので、詳しいことはあまり聞けなかった。尤も、まだ博士にも策略を気づかれてはいないだろう……。

いや、あの人のことだ。気がつかないふりをしているという可能性もないわけではないだろうし、俺にこれを渡したということはそう遠くない未来で……。

「今はやめとこうか」

あんまりふさぎ込んだ考えばかりでは、気分も悪くなる。常に最悪の事態を頭にいれておくことは重要だが、それでネガティブになるのは本末転倒だ。

とりあえずは、拳銃の使い方だが……。

「拳銃なんて、久しぶりにもつな」

あの時は、自分がまさかISを扱えるなんて思ってもいなかったし、護身用くらいのレベルでしか拳銃は使えないはずなんだが。

まずは一つ手にとり、十数メートル先の標準を定めて何発か撃ってみる。

確かに、反動は凄いが無視できるレベル。知らぬ間に筋力でもつけたのかもしれないが、今はとりあえず無心で撃ちたかった。

両手で支えて一マガジン（八発）を撃ちきったところでリロード、そして今度は右手で片手撃ち。さっきより狙いは少しずつれるが、それでもなんとか撃てる。

また一マガジン撃ちきってからリロードして、今度は左に。それが終わったなら二丁の拳銃を左右に持ち、交互に撃つ。

相変わらず反動は来るが、それよりも一心不乱に撃ちまくる。

途中で、重さの調節に使われていた鉛を調節しながら自分にあった武器にしていく。

用意したマガジンを全て使い切ったところには、もう既に感覚を取り戻したどころか、以前より俄然撃ち易くなっている自分がいた。

「この感覚、か……」

忘れていた感覚、というよりは抜けていた感覚と言った方が正しいだろうか。それほどの違和感を胸に、俺は自室へと戻った。

## 第五話

（忘却の彼方）

あくる日、俺が朝食（朝定食セット＋ミニカレー）を食べていると、ラウラが近寄ってきて。

「今日も昨日と同刻同場所にこい」

「了解。ラウラはもう朝食食べたのか？」

「今からだ」

「じゃあ、待ってるからこっち来いよ」

「分かった」

ラウラが朝食（パンとコーンスープにチキンサラダ）を持ってきたのを確認して、食べるのを再開する。

「そういうば……お前、私と以前にあったことはなかったか？」

「は？」

俺の記憶上ではラウラとあったことなんか無いし、勿論ドイツにもいったことがない。

「いや、多分人違いだろう」

「自己完結できたなら何よりさ」

ぼそっと、ラウラはこう言った。

「……あいつの瞳は紅かったからな」

「何か言ったか？」



あえて聞こえてないふりをしたが、聞こえないはずがなかった。だが、紅色か……。

ラウラは色々と勘が鋭いことがある、多分昔の俺も少しながら覚えてはいるはずだ。だが、まだ今思い出してもらうわけにはいかない。

「そつえば、朝からしつかりと食べるんだな」

どうやって話をすり替えようか迷っていると、ラウラから話を變えてきた。

「ん？ まあ今日はちょっと腹が減ってたからな」

昨日の晩の射撃練習が結構きてるみたいで、いつもより少し多めの朝食だった。

「朝にエネルギーを十分補給しておくのはいいことだ」

逆に夜沢山食べるのはあまりよくないらしい、というのもちやんと理由があつて。なんでも、あまり身体の活動がない夜に沢山食べてもそれは全部脂肪分に回ってしまうかららしい、脂肪がつくと身体のキレに問題が発生して自分の力を十分に発揮できないそうだ。

脂肪分つてのは、いわば身体の中にある重りみたいなものであるからその理論は正しいと言える。

「常識だ」

と、少し誇らしげにパンをかじるラウラ。

「そうかい」

「ふん……」

それからは俺もラウラも朝食を黙々ととった。

時は流れて授業に。

「今日の実習は武器の特性についてだ。デュノア」

「はい」

「今からターゲットを出す、それをアサルトライフルを用いて撃ち抜け」

ルールは至極単純で、呼び出されたターゲット（今回は500枚）を三分間でどれだけ破壊することができるか、というものでターゲット一枚一枚に得点が違うので高い得点のものを優先的に破壊することが優先される。

「分かりました」

話を聞いてすぐにISを展開し、すぐにアサルトライフルを構える。

シャルル・デュノア……。世界でISが使える男子、ではなく実は女子でその実態には別段興味ない。

使用ISはR・リヴァイヴ・カスタム？。以前から汎用性に優れ

ていたラファールの拡張領域パススロットを増やして、様々な武器を色々入れてるので様々な戦局に対応できるらしい。

実際問題、逆にやるが多すぎて俺には向かない戦い方である。

「終わりました」

俺が色々と考えている間に、既にターゲットは全て撃ち抜かれていた。

スコアは10352点、量産機の平均が大体5000台、代表候補生の平均は大体8000台なのでかなり高いと言える。

「ふむ、まあいいじゃないか。セシリア、日崎お前達もだ」

「了解ですわ」

「分かりました」

イズムルートを展開、そして二丁拳銃を構える。

「全部含めて約一秒……もう少し早く展開しろ」

それでも早い方だと思うのだがな、二丁拳銃は昨日きたばかりなんだし。

「オルコット、銃口をどこに向けている」

「これはイメージしやすいように……」

「言い訳は無用だ、直せ」

さすがのセシリアもこの気迫には勝てないようで、しゅんとしながらも素直に従うようだった。

「お前達にも同様のことをしてもらう、まずはオルコットからだ」

傲慢でもある射撃の腕の見せ所なので、セシリアは張り切っていた。

「フランスの第二世代には負けませんことよ」

「昨日の試合をみたところ、射撃に関しては僕の方が上だと思うな」

俺としては後がつかえてるので早くしてほしい、それがお互いのためだ……。

「いつまで待たせる気だ」

織斑先生の制裁が下ったため、英仏の睨み合いは終わったがセシリアの方はまだ勝つ気でいるみたいだ。

「では……いきます」

セシリアは六つのビットを操作して、ターゲットを破壊していく。

「てか、ビット操作なんてよく出来るよな」

「一夏、あれ多分セミオートだ」

ビットの動きをよく見ると、停止と放射のタイミングが少し違う。移動はマニュアルだが、攻撃は秒単位のオートだろう。

まあ、そうだとしても六つのビットをしかも射撃間隔を考慮した上で動かすとは……。代表候補生の名は伊達じゃなかったと言ったところか。

「終わりましたわ」

スコアは9875点、平均は軽く越えたもののシャルルには程遠い。

「ほらね、やっぱり僕の勝ちだ」

「だが、まだ俺が残ってるぜ」

そう言って、拳銃とツインダガーを取り出す。

「俺は少し武術を嗜んでいてな、その延長線上として軍の訓練も受けてたんだ」

「一体なにを言ってますの？」

「まあ、見てなって」

動かない無機質的な相手に、時間はとらない。

「全ては、一瞬だ」

アシン  
ドゥラヴァ  
トウリー  
「一つ、二つ、三つ……」。

心の中で呟いて、力を覚醒させる。力の流れが変わったことがある、自分の身体が自分のものじゃないみたいな、そんな感覚……。

「では……、始め！」

開始と同日に、ツインダガーの出力を最大にして自分は超速回転を行う。更にツインダガーを脇に挟んで二丁拳銃でこぼれたターゲットを狙い撃つ。

その間、僅か三秒……。

「終わりました」

力の流れをまた元に戻して、気分を整える。

「嘘……でしょ？」

「私達の二倍以上の得点を、あんな一瞬で……」

代表候補生どころか、この場に居合わせたほぼ全ての人間を震撼させてしまっていた。ちょっと本気を出しすぎてしまったようだった。

カラーコンタクトがずれていないかを確認してから、イズムルートを収納する。

「すげえよ、ヴァン。こんなこともできるのかよ」

「まあな、母さんの形見で不甲斐ないところは見せるわけにはいか

ないだろ」

……だとしても、反応が良すぎる。ハイパーセンサーも感度が抜群、回転に用いたエネルギーとツインダガーに用いたエネルギーの総和も以前より減っている。

昨日はそんなことなかったので、やはり東博士が拡張領域やその他うんぬんかんぬん言っていた時『ついで』に色々と弄ったんだろ  
う。

多分、他の機能も以前より強化されているに違いないだろう。あの人がしそうなことだし、俺としては願ったり叶ったりだ。

「こりゃ、ヴァンとは戦わない方がよさそうだな」

「……戦場に行けば嫌でも戦わなきゃいけない時がくる」

「え？」

「いや、なんでもない」

さっき一夏に言ったことを、自分に言い聞かせるべく復唱しながら、俺はいつかくるはずの戦争に嫌悪感を感じていた……。

## 第五話 忘却の彼方（後書き）

いかがだったでしょうか。

今回は複線だらけの話とってもらってもいいくらい、色々残しました。

これからまた回収をどうやっていくのか、まだまだ考慮中なんですけどね。



## 第六話 音速の先にあるもの

全ては、一瞬だ。

なんてことはない、時間はいつだって細やかな点の連続……。ゲームとかであるセーブポイントとかの概念とやら変わりはないと思うが、当然ながら実際に時間は遡れない。

だからこそ、一瞬なのだ。

俺が俺であるために一番必要な感覚とも言えるそれは、俺が抱えていた重みをさらに思い知らすこととなる。

おかえり。

忘れていた感覚……いや、一度完全に失った感覚。失うことを望んだ感覚。

ただいま。

忘れていた記憶、忘れようとしていた記憶、思い出したくない記憶……その全て。

今も昔も、あの日あの時あの場所で変わらざるをえなかった俺の人生。いや、結局のところはそれがなかったとしてもこの先にある運命は避けられるはずがない。ただ、俺が関わるかどうかの相違点しかない……それだけだ。

## 第六話

「音速の先にあるもの」

少し集中出来てなかった授業も、その後のHRも終わって放課後。現在はラウラと訓練するべく、アリーナに向かっている。

「おっ、ヴァムーだ」

「えっと……あ、のほほんさん」

一夏がそう言っていたのを思い出し、口にする。

「ん、おりむーと同じ呼び方なんだね。まあいいけれど」

「何か用件があるのか？」

「えっと、生徒会長さんから文を預かってまいりました」

と、袖で隠れていた手から封筒を渡される。……どっから出てくるんだよ、おい。

色々とツツコミ所は満載だったが、こういうのはあまり気にしないに限る。それに、封筒の中身も気になるし。

そして封筒を開けると、中には一通の手紙が。……ああ、文って手紙のことを指してたのか。こういう風に、たまにわからない日本語があるから困る。

とりあえずは、手紙を読んでもらうことにしよう。

『夕食前 に来て』

……どこに行けばいいんだよ、おい。

気がつけばのほほんさんはいないし、さらに俺は彼女の連絡先も知らない。

「……困った」

とりあえずヒントがないかどうか、封筒の中を調べてみるが何もない。手紙の裏にもないもないし、シャーペンなどで傷つけた様子もない……が、一つだけ分かった。

仄かな柑橘系の匂い、するところつまりあぶり出しだろう。戦場においてもたまに使われる文通手段としてあり、運のいいことにあぶり出しを上手にするコツも習ってたりする。

が、やっぱり一つ疑念が晴れない。

秘匿情報としてあぶり出しを選んだのは容易に想像ができるが、わざわざ秘匿情報にする必要がある？

「お、ヴァンじゃないか」

思索していて突然後ろから声をかけられたもんで、我ながらビツクリしたが平然を装って一夏のほうに向く。勿論、封筒は既に征服の内ポケットの中に収めていて抜かりはない。

「今から特訓か」

「ああ、やっぱりパートナーであるシャルルに迷惑はかけられないしな」

一日二日どころにかなるほど、ISは甘くないがそれでも一緒にいる時間が長ければ長い程、ISは応えてくれる。

「精々俺達とあたるまで負けないようにな、とだけ言っておこう」

「なんでそんなに自信があるんだよ」

「そりゃ、パートナーがラウラだから……」

って、なんで俺はこんなにラウラを信頼しているんだ？

それに、久しぶりに開放したあの力……。もしかしたら俺は思い出しすぎてるのかもしれない、あの日のことを、あの戦争のことを……。

「どうしたんだ？」

「いや、なんでもない」

考えすぎだ。そう考えることにして、今は特訓に向けてしっかりしとかないとラウラに申し訳ない。あるうことが信頼されてるんだ、俺は。その信頼を裏切るといふ行為自体最悪なことだし、それをしないようにも日々頑張ってきてるんじゃないか。

「行くぞ、一夏」

「お、おう」

一夏と一緒にアリーナに行くと、既にラウラとシャルルがそこにいた。

「……何故ソイツがいる」

「いや、途中であっただけだ。それに今は戦場ではない、そう気を立てるな」

「そんなことを私がするわけがないだろうが、だが常に最悪の状況を予想しておくことは悪いことではない」

「今から気にかけてすぎだ」

「備えあれば憂いなし、という諺がこの日本にはあるんだろう?」

確かにそうだが。

「やっぱり、日崎君とボーデヴィツヒさんはお似合いだね」

なんてことを言ってくれる、シャルルよ。

「俺も思うよ、ヴァン」

一夏までっ?

「ふん、勝手に言っているがいい」

「どこに行くんだよ、ラウラ」

ぷいっと外を向きながら、頬を少し赤らめてスタスタと歩き始めたので慌てて後ろを追いかける。一応一夏とシャルルに別れを告げてから、だが。

「おい、何でそんなにはぶててるんだよ」

「別に……はぶててなどいない、ホラ、今から訓練するぞ」

先ほどまでの雰囲気とは打って変わって、凜とした表情でISを展開するラウラ。この戦闘に向けるラウラの気合は凄まじいものだ、いやはや素晴らしい。

「じゃ、行くか」

イズムルートを展開して、レーゲンの前に立つ。

「今日は軽い戦闘だ」

まわりの生徒たちをあえて残すことで、障害物と考えるみたいだ。軍の訓練でもちよいちよいやってきたので問題はないし、それにこれからのトーナメントでも活かせることがあるだろう。いつも基本的には一対一か一対多、しかも自分以外に味方が完全にいない状態を考慮してイズムルートに乗ってたからな。

この間の瞬間回転攻撃も、完全なる一対多を見越して組み立てたものなので今回他味方がいる状態では無理だ。

「じゃあ、始めようか」

スイーティー・ブリーヤ  
灰色の嵐を展開して、ラウラを迎撃しつつ距離をとる。ラウラのA I Cに対抗するべく、俺は常に移動している。

A I Cの弱点として、完全なロックオンができていないと意味がない。つまり動きを読み取られないようランダムに動く必要性があり、それをラウラに対して行うのは至難の業であるのは間違いないが、まだ距離がある分俺も何とかいけている。

そしてそれをするために集中力も必要だし、A I Cは多数の攻撃には不向きだ。

「そろそろ加速する」

マルチ・イグニッション・ブースト  
連続瞬時加速を用いてランダムな直線運動で動きつつ、距離を詰めながらも射撃を続ける。リロードのタイミングを考えつつ威嚇射撃しているので、A I Cに阻まれることもない。

「よく考えたものだ、だが……」

動きを変えようとして、連続瞬時加速の切替を行おうとしている時にタイミングを合わされてワイヤーで左脚を絡みとられる。

「甘いぜラウラ」

俺は灰色の嵐を収納し、ツインダガーを展開する。その片方にエネルギーを集中させてその刃を伸ばしてラウラに向け、もう一つのほうはワイヤーを切るのに使う。

「甘いのは貴様だ」

伸ばしたエネルギー刃はAICによって阻まれ、さらにワイヤーを器用に動かしてツインダガーを落としてつつ、イズムルートの全身を絡めとる。

ワイヤーに絡まれ、さらにAICにも動きを封じられる。だが、これも予想通り。

「残念だが終わりだ」

「試合はまだ終わってないぜ」

落とされたツインダガーの出力を、最大限まで引き伸ばす。

「なんだとっ」

ラウラのAICが解けた一瞬を狙って、俺はスラスタ一全てを用いた本気の瞬時加速を行う。それによりイズムルートは一気に最高速度まで加速、さらにその際に自らに回転を加えることでワイヤーを引き千切る。

その加速をさらに強める、それによりイズムルートは限界を感じてか警告音を鳴らす<sup>アラーム</sup>が、これ以降の戦いでも音速を超えられないよ<sup>マッハ</sup>うじゃまだまだだ。だからまだ頑張ってくれ、イズムルート。お前は伊達に閃光の名を名乗ってるわけじゃないだろ、音速くらい超えられないでどうする。

その思いに応えたのか、警告音が聞こえなくなる。音速を超えた先にあるもの、無音の空間。何もかもが止まって見えその中を自分



が飛んでいる感覚。

そうだよ、これだ。

俺が求める景色、俺が求める感覚。

何もかもが彼らにとっては一瞬の出来事、俺にとってもこの景色は一瞬のものでしかない、だがこの一瞬さえつかめれば……。俺は負けない。

この景色が終わる前に、全てを終わらせる。そう感じて瞬時に翡翠を展開させる、攻撃態勢に入る。

そう、全ては、一瞬だ。

「リジウム・レーザー  
音速居合」

今まで加速してきた力学的エネルギーを全て一撃に繋げた攻撃、速度を増すごとに威力を増す。音速を超えた攻撃は言うまでもなくシールドエネルギーをこっそりと持っていく。

スラスターを逆方向に噴射することで停止し、ラウラの方を伺う。

「完全に捕らえたと思ったんだが……甘いのは私だったようだ」

「いや、俺もあれは博打だったから」

それにしても、今のはなんだったんだろうか。

博士がイズムルートを弄ったと分かってから、スペックの確認は

した。だが最高速度は音速を超えてはいなかった、精々以前の二割増し位。やはり形態移行フォームチェンジへの前兆なのか？

今は考えても分からないので後で博士に聞くとして、とりあえずは今の感覚だけは忘れたくない。音速の先にある世界、その景色、その感覚……。

## 第六話 音速の先にあるもの（後書き）

いかがだったでしょうか、楽しんでもらえたら幸いです。

今回はちょっとヴァデム君に頑張ってもらいました、というのませっかく閃光という字を当てたので全ISSの中で最高速を誇ってもらいたいんですね。

個人的に、戦闘において一番大切なのは速さと思っているんで。

ではでは今回はこの辺で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3537y/>

---

十二のBSIS

2011年11月22日23時49分発行